

光明寺蔵 田中訥言筆 当麻曼荼羅縁起絵巻の模本について

中川 満帆（鎌倉国宝館）

鎌倉市材木座に所在する天照山蓮華院光明寺には、鎌倉時代に制作された絵巻物の優品である国宝・当麻曼荼羅縁起絵巻（鎌倉国宝館寄託中）が蔵されている。そして同寺には、この国宝本絵巻の模本も伝蔵されており、例年春先に開催される寺宝展で公開されていることから一部ではその存在が知られていたが、この模本絵巻も令和4年2月より鎌倉国宝館へ寄託いただく運びとなった。「口絵」。この模本絵巻は、江戸時代後期にやまと絵の復古を目指し活動した絵師、田中訥言（明和4年〜文政6年（1767〜1823））の二十七歳の時の筆となることでも注目され、さらに制作時期のわかる訥言作品の中ではもつともはやいものに該当することから、訥言研究史上にあっても大きな意義をもたらすものである。このたびの寄託を機として、模写の原本たる当麻曼荼羅縁起絵巻の研究がすすむこと、ならびに本作の公開の機会が拡大することにより訥言研究の一助となることが期待されている。（以下、同絵巻については本作、または訥言模本と称す）。

本作については、平成二十六年に徳川美術館の秋季特別展「復古やまと絵 新たな王朝美の世界 ―訥言・一蕙・為恭・清―」に出陳され、吉川美穂氏によって紹介がなされている（註1）。また光明寺の設立する記主禪師研究所の研究員をつとめられる大谷慈通氏、杉浦尋徳氏によって、本作制作の背景について考察がなされ、また本作以外の模本との比較がおこなわれている（註2）。本稿では、訥言模本の基本的な情報を記録することを目的とし、国宝本絵巻と訥言模本の比較を通じて絵画的な特徴を示すこととしたい。

一、 訥言模本の概要

国宝本絵巻には、複数の模本があることはすでに紹介されているとおりであ

り、本作の登場をもってこれが4例目といえる。本作以外の3例とは、東京国立博物館本、当麻寺奥院本、そして個人蔵本をいい、河原由雄氏によって国宝本絵巻との差異をはじめ、早くからまとめられている（註3）。

本作は、国宝本絵巻とほぼ同等の法量を有し、またその内容は国宝本絵巻の折れ伏せや損傷の具合までも正確に再現する意識のもとに仕上げられた本格的な模本である。また本作の絵画部分を担当したのは、やまと絵の復古という絵画活動に身を置いた絵師・田中訥言であるとみられ、他の模本とはまた異なる制作背景があることがうかがわれる。

本作を訥言の筆とみなす所以は、内箱の蓋表の墨書（図1）および蓋裏の貼札墨書にある（図2）（註4）。ここには、本作の制作者として、絵は田中訥言が、詞書は源公風が筆をとったことが明記されている。惜しいことに本作中に絵師らの落款や印章といったものはこされておらず、またこの墨書の筆者も明らかにしないが（註5）、現存する訥言作品からみる彼の古典研究の時期と、訥言が古典作品に携わることによって導いた松平定信（宝暦3年〜文政12年（1759〜1829））による古物の調査の時期を鑑みるに、本作を訥言筆とすることに批判は少ないものと思われる。貼札墨書の内容はすべて定信の言であり、大きく二つのことを伝えている。はじめに定信による国宝本縁起の添え状（図3）とほぼ同じ文言を記し、その後過去の鑑定について改めて触れたのち、詞書を源公風、絵を田中訥言に担当させた旨を示し締めくくる。以下全文を記す。

「此曼陀羅縁起は住吉法眼慶恩が筆也、筆力顕然として疑ふべからず、まいて住吉家の古記^三慶恩が曼陀羅縁起を悉がきしをしあるをや、抑慶恩ハ元暦建久のころ撰津国住吉の繪所なり、さればこそ詞書せされし後京極殿下と代もあひかなふべけれ、志かるに永真の証侍るはいかゞあらん、よてこの事をあきらかに志らしめんがため寛政五年八月三日佐少将定信かいつけはべる也、

当麻の曼陀羅縁起二巻ハ鎌倉光明寺ニあり 此画の末ニ古土佐の筆也ト狩野永真が書たる
跋ありト沙汰したるニ左ニハあらす 故に別ニ其事かいてやりぬ

右上下二巻原本真写

詞書 源 公風筆
絵 田中訥言画

依命 記之
寛政五年丑九月 旦

(※旧字は新字に改めた)

定信は、国宝本絵巻の絵師は住吉慶恩（不詳）であり、その絵画様式は、詞書の後京極殿（九条良経）のものにもよく通じていて制作年代の齟齬がないと評し、狩野永真安信（慶長18年〜貞享2年（1614〜1685））による鑑定は果たして正しいか疑わしいので、寛政五年（1793）八月三日に改めてこれを調べた、という。狩野永真安信の鑑定とは、現在、国宝本絵巻の上巻末に付されている一紙（極書き）のことであり、「右曼陀羅之縁起上下巻土佐古将監」真跡決然而無干涉猶豫者也」狩野永真法眼證之印」というものである（14頁以降を参照）。安信は国宝本絵巻の絵師を土佐将監としている（註6）が、これについては不詳で、定信はこの見立ては誤りであると否定したのである。本作の全長は、上巻が七九七・八センチメートル、下巻が六九六・二センチメートルで、縦寸は両巻とも五一・一センチメートルである（註7）。各紙の法量は本稿末尾に国宝本絵巻とならべて示したので参照されたい。右にも触れたとおり、本作は詞書と絵画とで制作者がことなり、各紙の継ぎ方や一枚あたりの法量にはばらつきがある。現状、紙継ぎ部分は3ミリメートルほどの重なりが茶褐色の濃い筋となつて確認できるが、とくに詞書に関しては上下にも紙を継いでいる部分が多く、本作の制作に関しては基底材の調達からしても分業制であったことが推察される。

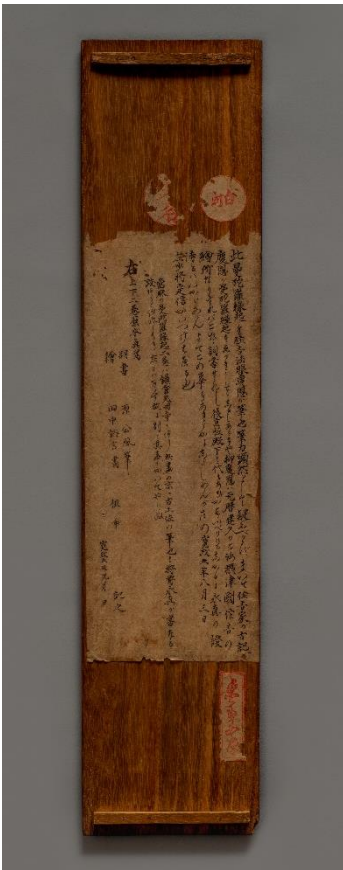


図2 模本 内箱 蓋裏 墨書



図1 模本 内箱 蓋表 墨書
(左) 箱書き (右) 紙書き

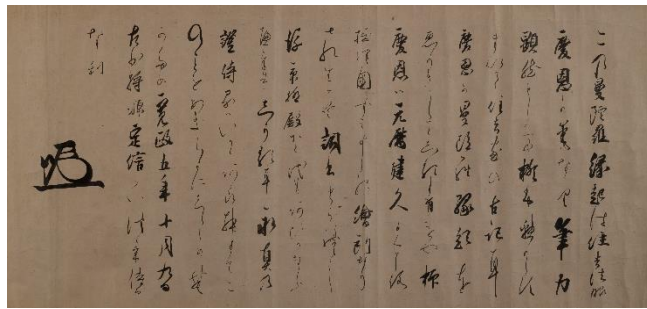


図3 国宝本絵巻 付属品 松平定信添え状

詞書を担当した源公風については多くの情報はなく、森尹祥の次男・森公風とみられている。持明院統の書家であった尹祥は幕府の右筆をつとめ、定信とは近い位置にいたものとされる(註8)。

田中訥言の古典学習における姿勢については、かねてより「現状模写」という言葉で語られているが、本作もそれに違わず、参照した作を誠実かつ忠実に写し取っている(註9)。虫損の跡や本紙の剥落から破れ、また紙継ぎのずれや皺の筋なども細かに写している様子が絵巻の全般にわたりみとめられる。全体の保存状態としては、破れや剥がれもなくおおむね良好ではあるが、現状模写には含まれない経年による円形の茶染みが随所にみられ画面を少々損なっている感がある。全巻をとおして茶色の靄がかかったような様子も、経年による紙焼けとみえ惜しい。また、本作の表紙は明るい若草色の紙に金銀泥で宝相華を手描きした凝ったつくりのものを採用している(註10)。

さて、訥言模本を具体的に見ていくのに先立ち、国宝本絵巻の概略を振り返っておきたい。国宝本絵巻は、その名の通り大和の当麻寺の本尊である綴織当麻曼荼羅の織成伝説を語る絵巻である。仏法に篤く帰依した姫君(横佩大臣の娘)のもとに尼僧と女が現れ、生身の阿弥陀にまみえたいという姫君の願いのために、浄土のまばゆいばかりの光景を示す大きな曼荼羅を織り上げる。尼僧と女はそれぞれ阿弥陀と観音の化身であったことが明かされ極楽浄土へ帰りゆくが、最終局で姫君のもとへは二十五菩薩を率いた阿弥陀如来が来迎し宿願は果たされる。本絵巻はその優美で洗練された画技から中央で制作され、構想には浄土宗西山派の証空上人らの関与が考えられている。伝来については、延宝三年(1675)に光明寺の大檀越であった内藤義概により同寺へ寄進されたことがわかるが、それをさかのぼる資料は残念ながらのこらない。しかしながら、上巻のしつとりとおおらかな筆から下巻末の来迎の圧巻まで、見るものを惹きこんでやまないこの絵巻へ注がれた視線は数知れず、研究の蓄積も非常に厚い(註11)。

とくに注目されるのはその大きな画面であり、通常横に継ぐ紙を縦に用いる

ことで大画面を設けている。国宝本絵巻の絵画部分には、一紙ごとそのほぼ中央に縦向きの折り皺がついており、先行研究ではこの皺はかつて国宝本絵巻が詞書と絵とが切り離され、絵の方は折手本のようなかたちになっていた時期があると推測されている。そして詞書と絵がつながった現状をみると、経年により生じた無数の横皺も確認でき、ゆえに形状変更の具動的な時期こそ記録に恵まれないが、現在のような卷子状にととのえられてから久しいことも間違いはない。

以下では、国宝本絵巻と訥言模本の差異について記していく。両本の全容が把握できるよう、また両本のあいだに生じている差がわかるように示した(14〜19頁の対照図を参照)。両本の相違点から、本稿では(一)錯簡のこと、(二)色彩のこと、という二点についてみていきたいと思う。

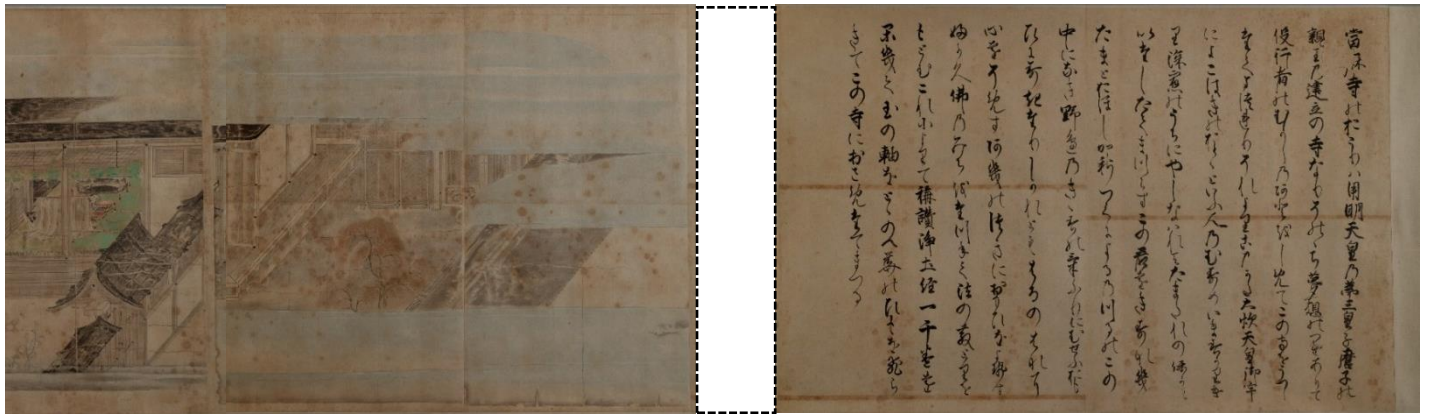
(一) 錯簡のこと

国宝本絵巻に一部錯簡がみとめられることや、不足している絵画の紙幅があることは現状の不自然な具合からも容易に考えられ、そのことは本作以外の模本からもすでに確かめられている。国宝本絵巻の錯簡をめぐる問題はかねてより議論されてきたが、国宝本絵巻にはなく模本にのみあらわされている絵についても同時に確認しておく必要がある。

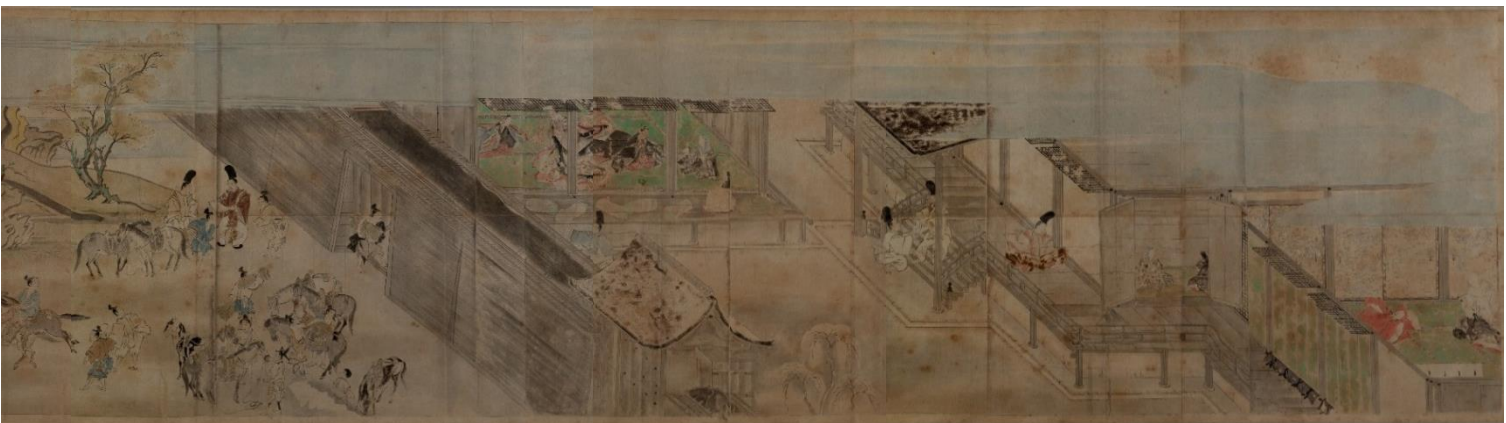
現状の国宝本絵巻にみられる錯簡とは、上巻最終局(第二十五紙)につながられた、すやり霞とそこからわずかにのぞく家屋の景をあらわした一紙のことを指す。直前に描かれた御堂とは明らかに接続せず、また紙幅の横皺もこれに続かない。さて、訥言模本には国宝本絵巻には描かれていない絵が二カ所にわたり確認できる。ひとつ目は上巻第一段のことであり、国宝本絵巻には姫君が机に向かい写経する姿を捉えたただ一紙のみがあるが、訥言模本には全部で三紙分の絵がみえる。白群のすやり霞から家屋がのぞき、その建物は姫君のいる部屋と隣接する部分であることを示している。訥言模本の絵の一枚目は、国宝本絵巻の上巻第三段に不自然な景をつなげている二十五紙目に該当することは



国宝本絵巻 上巻



訥言模本 上巻

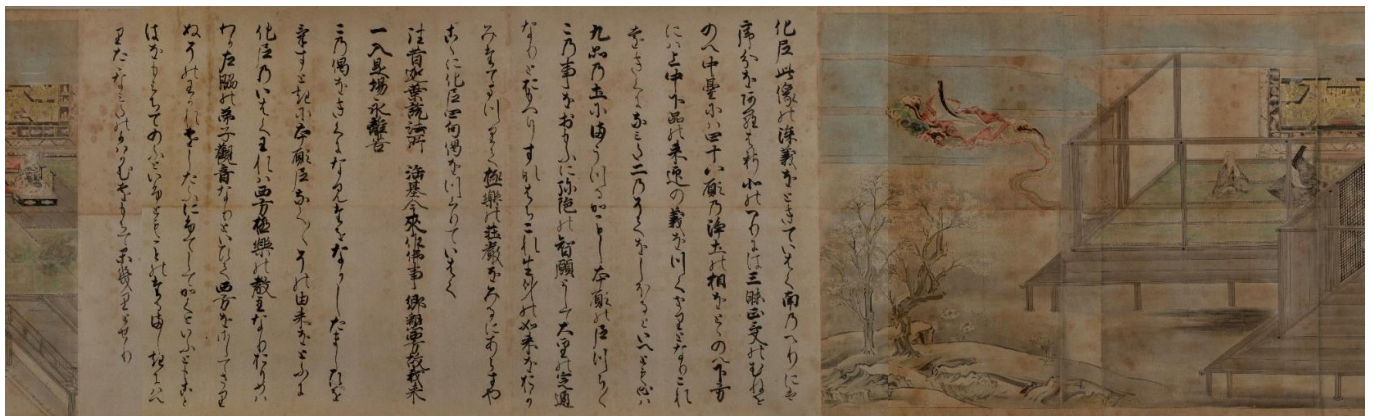
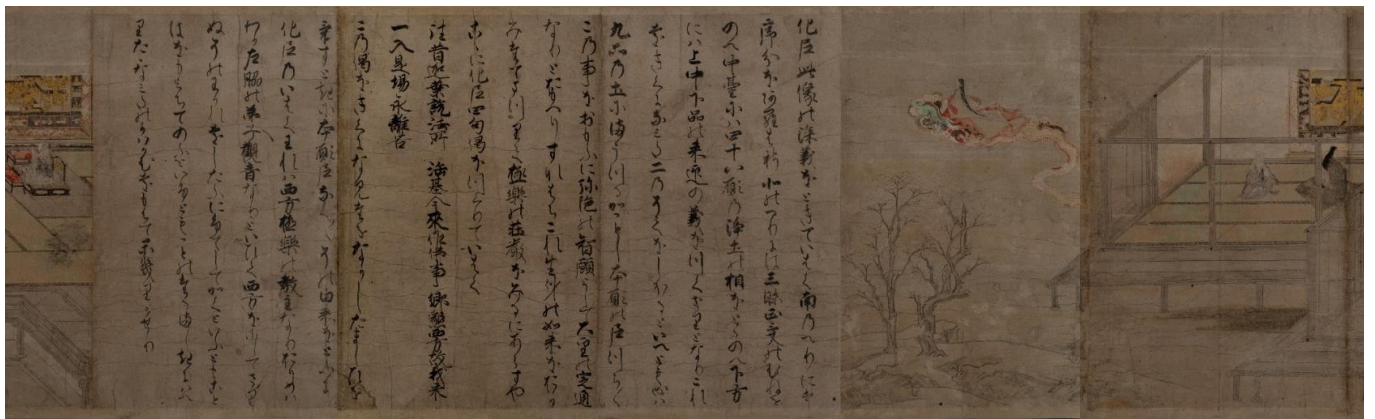
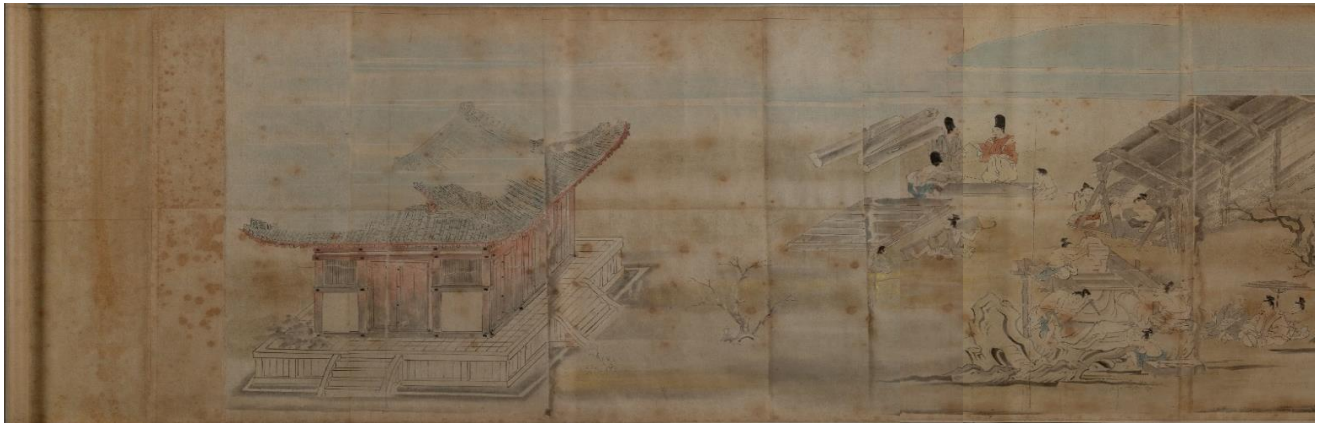
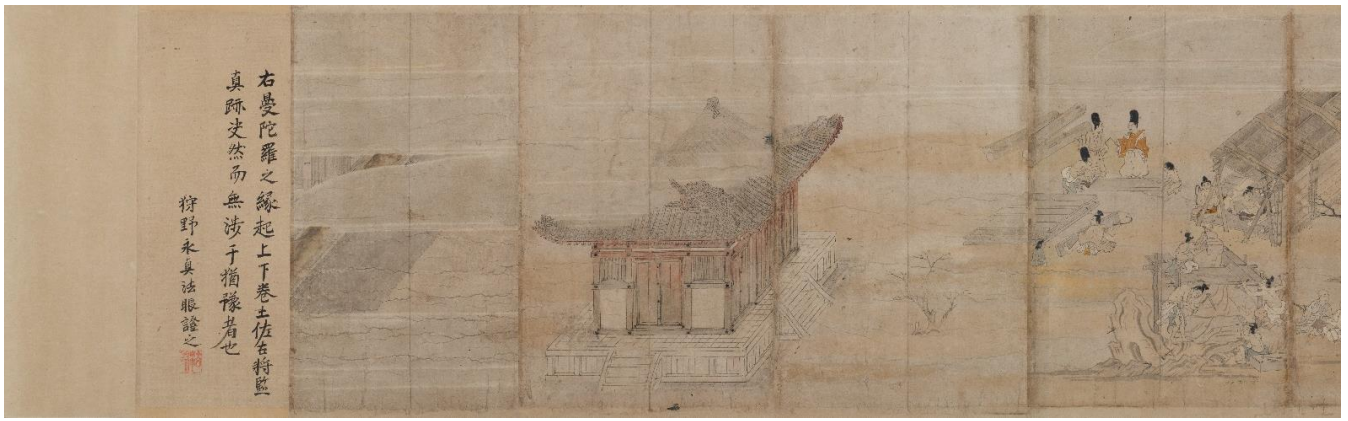




国宝本絵巻 下巻



訥言模本 下巻







先学の指摘するとおりであるが、訥言模本が国宝本絵巻のこの錯簡を訂正して完成させていること、また訥言模本の絵の二枚目に至っては国宝本絵巻のいずれの箇所にも存在しないものであることは興味深い。そしてこのふたつの現象は、東京国立博物館本（以下、東博本と称す）と当麻寺奥院本にもあらわれている。

もうひとつ、訥言模本には国宝本絵巻には存在しない絵が描かれている。上巻第二段の末に描かれたそれは、蓮糸を紡ぐ姫君らに蓮茎を届ける男たちの描写であるが、訥言模本にあらわれた一紙は直前の景と矛盾なく接合しており、背景の土坡や樹木の様子は下巻末の景にも通じており興味深い。そしてこの一紙についても、東博本ならびに当麻寺奥院本は同じ図様をそなえている。

残念ながら、訥言模本の登場をもってしても、国宝本絵巻の上巻第一段で錯簡がおこった背景に関する新たな情報は見出しがたい。一点、訥言模本では、

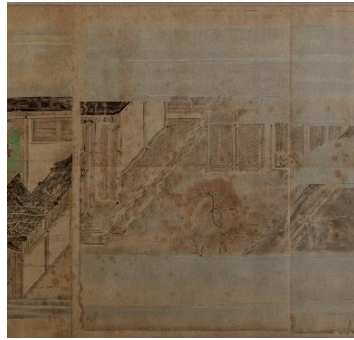


図4 模本 上巻 第一段

上巻第一段の絵の二紙目と三紙目の接続部分に、双方が画巻としてつながれていなかったことを思わせる破れ跡を写していることは注目される(図4)。また、錯簡とはいわないが、国宝本絵巻と訥言模本とは、狩野永真安信による極書きの置かれる位置も異なっている(註12)。

(二) 色彩の点と

訥言模本がいかに国宝本絵巻の忠実な模写であるかはこれまでに述べてきたとおりであるが、この模本としての特徴はその彩りにあらわれているように思われる。国宝本絵巻の制作は鎌倉時代後期と考えられており、訥言がこれを模したとされる寛政年間(1789~1801)前期には制作されてからすでに六百年は経過している。当然ながら訥言は経年による退色のすすんだ国宝本絵巻を実見したことになる。

本作を概観して目にとまるのは、その色がまことに明るく軽やかに賦されていることである。全巻を通してあらわされるすやり霞は、国宝本絵巻では白色の下地の上にごく薄く青を重ねているが、この白群の表現は現状ではほとんど青を感じさせないほど微かなものとなっているのに対し、訥言模本ではさわやかな青みのはっきりとしたなびいている(図5)。ほかの色に関しても、訥言模本は比較的明度の高い色合いを好んだとみえ、暈の緑や板敷き床の茶(墨)、幔幕や女性の装束の朱(図6)など、時に驚きの鮮明さをもって示されている。また、下巻に登場する織り上がった当麻曼茶羅の外縁部は現状紫色に彩られている(図7)。一見大胆な選択とも思われるが、国宝本絵巻の退色の具合をあらかわそうとつとめた跡とうかがわれ、暖色の後退した色味を示すべく透明感のある紫色を施している。



図5 模本 上巻 第三段



図6 模本 下巻 第二段

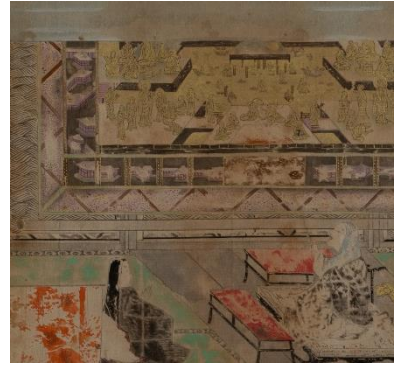


図7 模本 下巻 第二段



図9 模本 上巻 第二段



図8 模本 上巻 第一段



図10 模本 下巻 第一段

あるいは、訥言の色彩感覚だけの問題にはとどまらないが、国宝本絵巻ではすでに肉眼で確認が難しいモチーフが、訥言模本では象られていることがあり、我々にとつては思いがけずもありがたい。主に、樹木に上げる花々がよくみえるが(図8)、これはどちらかと言えば花そのものを線で描くのではなく、暈で輪郭をとり、対象を浮かび上がらせる外隈に近い感覚がある。ほかに、上巻第二段の姫君たちが運ばれてきた蓮茎から糸を紡ぐ場面では、国宝本絵巻ではほとんどその姿が見えない蓮茎の束が、訥言模本ではぼうっと浮き上がるような描写で示されている(図9)。同様のことを、下巻第一段の曼荼羅を織る女性のあしもとにある道具類の描写にもみることができる(図10)。訥言の現



図11 模本 上巻 第三段

状模写に対する意識の高さがうかがえる部分であり、同時に訥言の思惑こそ計り知れないが復元模写にも成功しているように思われる。国宝本絵巻ではすでに失われてしまった文様も可能な限り復元しようとするかのような箇所も散見され、現状模写から復元模写への跡が見え隠れするのである。そのほか、国宝本絵巻との細かな描写の差を指摘すればきりがながい、訥言の画技

や筆の癖と一括することのできない箇所がひとつある(図11)。上巻末、堂宇の端、折れ筋の下辺には、何らかの脚部のようなものがみえる。これが何を意図するかは全く不明である。また、訥言模本では壁面の彩色に薄墨を刷いたような描写がみえるが、これは他の精細な模写に比して残念である。

訥言が現状模写の絵師として評価されていたことは、その折れ伏せ等までをも徹底的に写し取る姿勢から確かにかがいがい知ることができる。色彩については、現状の忠実な写しという体験を通じて、図らずとも当初の彩りや構図を復元的にあらわしているようにも思われることを記しておきたい。

二、訥言模本の評価について

国宝本絵巻の制作は鎌倉時代後期と考えられているが、制作地はその作風からも鎌倉地域ではなく中央であることには一定の見解をえている。光明寺は浄土宗第三祖・然阿良忠(正治元年〜弘安10年(1199〜1287))が開祖。法然上人の教えを伝えるべく、十三世紀中ごろに鎌倉に浄土宗の礎を築いたのがはじまりである。そしてその頃、国宝本絵巻がどこに所在していたか、記録の上ではたどることができない。訥言によって模本が制作された経緯については、吉川氏、大谷氏による論考に詳しい(註13)。本論の最後にも、鎌倉地域と国宝本絵巻、そして模本をつなぐとみられる記録を簡略に列挙しておきたい。

元正〜文応年間頃	良忠上人、鎌倉に入り、浄土宗教の基礎を築く (光明寺の前進である悟真寺を拠点とする)
鎌倉時代後期	国宝本絵巻が制作される
延宝三年	内藤義概より国宝本絵巻が光明寺へ寄進される(註14)
寛政五年春	松平定信、海防警備のため鎌倉・逗子を巡視する
寛政五年八月三日	松平定信、国宝本絵巻を鑑定する
寛政五年九月	田中訥言、源公風ら、模本を完成させる(註15)
寛政五年十月九日	松平定信、国宝本絵巻に極書きを付す

先に触れたように、国宝本絵巻には松平定信による添え状(図3)が付属しており、「此曼陀羅縁起者住吉法眼」慶恩が筆也筆力」顕然として疑ふべからず」まいて住吉家の古記二」慶恩が曼陀羅縁起を」ゑがきしを志るしあるをや抑」慶恩ハ元暦建久のころ」撰津國住吉の繪所なり」さればこそ詞書せされし」後京極殿下と代もあひかなふ」べけれ志かるに永真の」證侍るハいかあらんよ」て」この事をあきらかに志らしめん」ため寛政五年十月九日」佐少将定信かいつけはべる」なり(花押)」と伝えている(傍線筆者)。ここで注目されるのは、傍線に示した日付が訥言模本の内箱蓋裏の貼札墨書と異なっている点である。訥言模本の墨書には寛政五年内のふたつの日付が記されており、まず右の定信極めと同じ文言の末尾に「八月三日」を、次に制作者名の後に「九月」をあらわす。つまり、寛政五年八月時点で定信は国宝本絵巻の制作者について見解を示しており、九月までには訥言・公風の両氏に模本制作を依頼する事業をおこし、完成させていたと読める。いずれにせよ、国宝本絵巻の添え状よりも

模本に付けられた墨書の方が早い日付を示しており、国宝本絵巻に付属する定信極書きが模本制作との関係の中で語られるようになったことが確かめられた事実は大きい。

訥言の画業について、この模本をもって新しく何かを語ることは筆者にはあまりにも難しい。彼が若くして国宝本絵巻や「三十六歌仙絵巻」(寛政六年模写)、「伴大納言絵巻」といった、一介の絵師には触れることがかなわないような名だたる古画にアクセスできた背景には、松平定信という実に大きな後ろ盾があった(註16)。寛政五年の春、定信は幕命により海防警備のために鎌倉・逗子を巡視しているが、この際に国宝本絵巻を目にしたことが考えられ、国宝本絵巻もまた定信の好古趣味にかなう作であった。訥言による当麻曼茶羅縁起絵巻の模写は、彼の現存作品中制作年がわかるものの中ではもっとも早いものであり、この模写で示した仕事が評価されたために、定信の古物調査に絵師として継続して抜擢される契機となったとも考えられる。

さいごに、現在存在が確認されている光明寺蔵当麻曼茶羅縁起絵巻の模本について整理しておきたい。模本は現在、東博本・当麻寺奥院本・個人蔵本そして今回の訥言模本の4件があり、これらのうち個人蔵本以外は上下二巻がおよそそろった状態でのこされている。制作に携わった絵師らの情報から、訥言模本がもっとも古いものといえる(註17)。訥言模本以外の作が、国宝本絵巻の臨模にあたるかについては慎重にならねばならないが、東博本や当麻寺奥院本が訥言模本と同じく錯簡を訂正した体をなしており、訥言模本の存在は当時からすでに知られていた可能性を示すかもしれない。

田中訥言その人の画業や、いわゆる「復古やまと絵」「復古やまと絵派」に関する議論は数多く重ねられており、彼の出身地の尾張では、徳川美術館をはじめ名古屋城等で展覧が度々催され関心は尽きることがない(註18)。また浄土教美術の展覧において、当麻寺奥院が出陳されるなど国宝本絵巻の模本が人の目に触れる機会はたびたびおとずれている(註19)。訥言模本を鎌倉国宝館が受託するという機会に恵まれたことを受けとめ、本作を国宝本絵巻の忠実な

模写であるという評価にとどまらせることなく、国宝本絵巻との関連について探究につとめ、またそれ自体が充実した見ごたえのあるひとつの作品であることを展示活動等を通じてひろめていく次第である。また本作所蔵先である光明寺には、国宝本絵巻のほかにも鎌倉地域を代表する「浄土五祖絵伝」や「浄土五祖絵（善導巻）」といった絵巻が伝わっている。今回は触れられなかったが、江戸期における鎌倉地域の絵巻に対する評価などについて見聞を深めることを、今後の課題としたい。

- (註1) 吉川美穂「田中訥言と復古やまと絵 および作品解説『復古やまと絵 新たな王朝美の世界』」
訥言・一蕙・為恭・清」徳川美術館、平成二十六年
- (註2) 大谷慈道「大本山光明寺蔵『当麻曼荼羅縁起』模本について(一)——模本流伝の経緯とその背景——」、杉浦尋徳「大本山光明寺蔵『当麻曼荼羅縁起』模本について(二)——二種の模本との比較を中心に——」いずれも『記主禪師研究所紀要』第一号、記主禪師研究所、平成三〇年
- (註3) 河原由雄「当麻曼荼羅縁起」の成立とその周辺」『日本絵巻大成』二四 当麻曼荼羅縁起 稚児観音縁起』中央公論社、昭和五十四年
- (註4) 貼札墨書の法量は、縦二九・一、横二二・〇。箱の法量は以下のとおり(単位cm)。外箱 縦五四・〇、横一一・三、高七・九。内箱 縦五七・七、横二五・三、高一〇・五。なお、図1(左)の画面は直接箱に書き付けるのではなく、紙を貼付しており、画面右上には墨で「二〇三十一」朱で「三十」(かき消し)の文字がみえる。
- (註5) 訥言の作品は、落款による編年の研究成果が示されている。木下稔「復古大和絵と田中訥言」『復古大和絵—田中訥言とその周辺—』徳川美術館、昭和五十三年。同「基礎資料—田中訥言の落款について」『金鏡叢書』第九輯、徳川黎明会、昭和五十七年。竹内美砂子「田中訥言—落款による作品の編年」『名古屋博物館研究紀要』第二六巻、名古屋博物館、平成十五年。朝日美砂子「田中訥言—走り続けた画家」『尾張のやまと絵 田中訥言』名古屋城特別展開催委員会、平成十八年。
- (註6) 「土佐古将監」については、国宝本絵巻の旧箱蓋裏の識語にもあらわされる。(傍線筆者)
「相州鎌倉天照山光明寺珍蔵當麻曼荼羅縁起絵巻」
傳前撰政太政大臣藤原良經公後京極殿真跡繪圖畫工土佐將監
延寶三之秋大檀越内藤左京亮從五位下義概以披誦之次更加修令寄附畢
現住四拾六世貴譽萬景天爾
- (註7) 本作では、現状模写を基本としているものの、本紙の法量や紙継ぎの位置に関しては国宝本絵巻のそれを踏襲していない。
- (註8) 鈴木淳「幕府書道師範森尹祥の書學」『書誌學月報』四〇号、青雲堂書店、平成元年
- (註9) 本作には「箱二金泥ヲ以テ記 當麻曼荼羅縁起 一卷」という籠字が書かれた紙片が付属する(参考図版1)。源公風による詞書も、籠字の跡が諸所にみられる。

(註10) 表紙は、上下巻それぞれ縦五二・〇、横四八・二センチメートル(参考図版2)。

(註11) 青陵「鎌倉光明寺の當麻曼荼羅縁起」『國華』二二二号、國華社、明治四十一年。田中一松「當麻曼荼羅縁起」『日本繪巻物全集』八巻、雄山閣、昭和五年。梅津次郎「図版解説 當麻曼荼羅縁起」『美術研究』五一号、美術研究所、昭和十一年。裏辻憲道「當麻曼荼羅縁起 上」『畫說』七月号、東京美術研究所、昭和十二年。裏辻憲道「當麻曼荼羅縁起 下」『畫說』八月号、東京美術研究所、昭和十二年。三山進「鎌倉の絵巻について」『国宝 當麻曼荼羅縁起絵巻』『鎌倉の絵巻』鎌倉国宝館図録第五集、鎌倉国宝館、昭和三十三年。白畑よし「當麻曼荼羅縁起」『新修日本繪巻物全集』十二巻、角川書店、昭和五十二年。佐伯英里子「當麻曼荼羅縁起絵巻」の製作背景に関する一試論『美術史』一〇六冊、美術史学会、昭和五十四年。河原由雄「當麻曼荼羅縁起」の成立とその周辺」『日本絵巻大成』二四 当麻曼荼羅縁起 稚児観音縁起』中央公論社、昭和五十四年。小松茂美「当麻曼荼羅縁起と稚児観音縁起」『続日本の絵巻』二〇、中央公論社、平成四年。成原有貴「阿弥陀をめぐる女性の信心と祈願—絵から考える—」『当麻曼荼羅縁起絵巻』の制作事情、『ものトイメー』を介した文化伝播に関する研究』科学研究費基盤研究B研究成果報告書、平成二十二年。成原有貴「当麻曼荼羅縁起絵巻」の制作意図をめぐる一試論『美術史』一七六冊、美術史学会、平成二十六年。

(註12) 昭和四十六〜四十七年に国庫による修理が行われているが、それ以前の修理歴等は不明である。前掲註1・2。吉川美穂「田中訥言の古画研究—松平定信との関わりを中心に—」『鹿島美術研究年報』三〇号別冊、鹿島美術財団、平成二十五年。

(註14) 前掲註6参照。

(註15) 訥言模本の箱には朱文内印「白河」、朱文内印「桑名」、朱文長方印「楽亭文庫」が貼付されており、これにより訥言模本は松平定信の手元に置かれていたことが知られる。なお、側面にも「四百三十六番」とあり、通し番号か。(渋沢栄一「楽翁公伝」岩波書店、昭和十二年。小野則秋「日本藏書印考」文友堂、昭和十八年。)

(註16) 前掲註13参照。

(註17) 白畑よし「当麻曼荼羅縁起」の模本について、『新修日本繪巻物全集』月報十二号、角川書店、昭和五十二年。河原由雄「当麻曼荼羅縁起」の成立とその周辺』『日本絵巻大成』二四 当麻曼荼羅縁起 稚児観音縁起』中央公論社、昭和五十四年。杉浦尋徳「大本山光明寺蔵『当麻曼荼羅縁起』模本について(一)——二種の模本との比較を中心に——」『記主禪師研究所紀要』第一号、記主禪師研究所、平成三〇年。

(註18) 菅原真弓「冷泉為恭とその画業に関する研究—為恭における復古意識と古典学習を中心に—」『鹿島美術研究年報』十五号別冊、鹿島美術財団、平成十年。日並彩乃「近世の土佐派と復古大和絵—「復古大和絵」の定義の問題—」『東アジア文化交渉研究』関西大学大学院東アジア文化研究科、平成二十六年。「復古大和絵—田中訥言とその周辺—」徳川美術館、昭和五十三年。「尾張のやまと絵 田中訥言」名古屋城特別展開催委員会、平成十八年。「豪商のたしなみ 岡谷コレクション」徳川美術館、平成二十四年。「復古やまと絵 新たな王朝美の世界—訥言・一蕙・為恭・清—」徳川美術館、平成二十六年。

(註19) 「特別展 當麻曼荼羅完成1250年記念 當麻寺 極楽浄土へのあこがれ」奈良国立博物館、平成二十五年

謝辞

模本の「寄託にあたり、天照山蓮華院光明寺さま、ならびに大谷慈通さまには格別の「配慮をいただき、ありがとうございました。今後も研究の発展および、作品の展示公開保存に尽くしていく所存です。

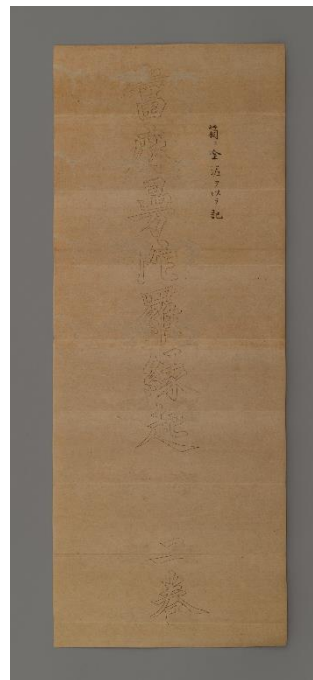
国宝本絵巻 (上巻)			国宝本絵巻 (下巻)			訥言模本 (上巻)				訥言模本 (下巻)			
紙数	段	横	紙数	段	横	紙数	段	横	上部縦	紙数	段	横	上部縦
第1紙	詞一	30.1	第1紙	詞一	30.6	第1紙	詞一	38.6	26.8	第1紙	詞一	38.2	26.3
第2紙	〃	31.9	第2紙	〃	30.8	第2紙	〃	38.6	22.2*	第2紙	〃	30.2	26.3
第3紙	〃	25.4	第3紙	絵一	30.4	第3紙	絵一	27.1	25.1	第3紙	絵一	40.0	25.2
第4紙	絵一	31.1	第4紙	〃	32.4	第4紙	〃	33.5	24.9	第4紙	〃	40.7	25.4
第5紙	詞二	30.4	第5紙	〃	33.0	第5紙	〃	30.0	23.9	第5紙	〃	40.7	25.2
第6紙	〃	31.8	第6紙	〃	32.3	第6紙	詞二	38.3	27.0	第6紙	〃	35.0	25.3
第7紙	〃	28.0	第7紙	〃	30.8	第7紙	〃	39.1	26.6*	第7紙	詞二	38.1	25.3
第8紙	絵二	31.1	第8紙	詞二	30.0	第8紙	絵二	39.4	25.6	第8紙	〃	37.0	25.2
第9紙	〃	32.3	第9紙	〃	31.7	第9紙	〃	40.6	25.5	第9紙	〃	16.6	25.1
第10紙	〃	32.2	第10紙	〃	30.4	第10紙	〃	40.7	25.4	第10紙	絵二	40.8	25.0
第11紙	〃	32.4	第11紙	絵二	30.7	第11紙	〃	40.5	25.3	第11紙	〃	40.4	25.2
第12紙	〃	32.3	第12紙	〃	31.5	第12紙	〃	40.5	25.1	第12紙	〃	11.3	25.4
第13紙	〃	32.7	第13紙	〃	31.6	第13紙	〃	19.6	25.0	第13紙	詞三	38.1	25.7
第14紙	詞三	30.9	第14紙	詞三	32.2	第14紙	詞三	38.9	24.7	第14紙	絵三	39.7	25.3
第15紙	〃	32.0	第15紙	〃	30.2	第15紙	〃	37.9	26.7	第15紙	〃	40.3	25.2
第16紙	〃	28.5	第16紙	絵三	31.1	第16紙	絵三	39.5	25.5	第16紙	〃	38.3	24.9
第17紙	絵三	31.6	第17紙	〃	32.7	第17紙	〃	40.3	25.3	第17紙	〃	39.7	24.9
第18紙	〃	32.5	第18紙	〃	31.4	第18紙	〃	40.6	25.2	第18紙	〃	40.3	24.7
第19紙	〃	32.1	第19紙	〃	30.9	第19紙	〃	40.7	25.0	第19紙	〃	21.1	24.5
第20紙	〃	32.7	第20紙	〃	31.8	第20紙	〃	40.4	25.2	一	極書	29.7	24.7
第21紙	〃	32.2	第21紙	〃	32.5	第21紙	〃	40.6	25.0	縦		51.0~51.1	
第22紙	〃	32.5	第22紙	〃	30.8	第22紙	〃	12.4	25.1	全長		696.2	
第23紙	〃	31.6	縦		51.6	縦		51.0~51.1					
第24紙	〃	31.7	全長		689.8	全長		797.8					
第25紙	〃	28.2											
一	極書	19.0											
縦		51.6											
全長		778.2											

*三枚継ぎ

寸法表 (単位 : cm)



参考図版 2



参考図版 1